

# MASセミナー第8回

「日本の街並はなぜ美しいのか」  
「我々はどこに住むべきか」

巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷



建築の歴史をたどる!



低層、高層のまえに  
住まいの要素とは…



高層集合住宅は1952年には建築家ル・コルビュジェによってフランス、マルセーユに現実化された。その後今日まで高層の集合住宅は先進国には日常的な風景となっていた。しかし今だ私が知る限り、マルセーユを超える内容をもった集合住宅をみたことがない。何故か、そのあたりを考えなくてはならない。高層住宅に何が可能かその最も基本的な問いかけが企画する側に欠けていると思うのだが…

今井 均

人間らしく生きるために



最近つくづく感じることは、私たち(建築家)は、生活のあらゆる局面と、それらへの関わり方に関心を持っている人種だということです。でも政治や経済のような分野ではなく、生身の人間として、動きを感じる分野に、です。ところが日本では、社会的には人をそのような存在として見るものが少なくなって来ているようです。電子メディアのせいもありますが、あらゆるものが許認可手続き化し、そこには文書(言葉)や、金銭化、日程化(数字)、頭脳化が先行しています。例えば資産運用の計算が出来ない人は、生きるのが苦しくなるといった具合に。それが「当然視」されると、このような建築家の言うことがバカのように聞こえてくるでしょう。そこにこそ真の姿があるとしても。こういう私たちも知って頂いて議論出来れば、と思います。

大倉 富美雄

街並みのDNA



「暮らしたいまち」「住みつづけたい街」ってどんなまちだろう?  
便利なまち? 安全なまち?  
物価が安いまち? ご近所の顔がみえるまち?  
静かなまち? 自然ののこるまち?  
コミュニティがあるまち?  
昔の面影が残るまち? 新しいきれいなまち?  
世界文化遺産に登録されるまち?  
思い出のあるまち?

ハードもソフトも矛盾する糸の絡まった難しい問題です。でも人が人らしく豊かに生きていくためにこれはとても大切なテーマです。

鈴木 理巳

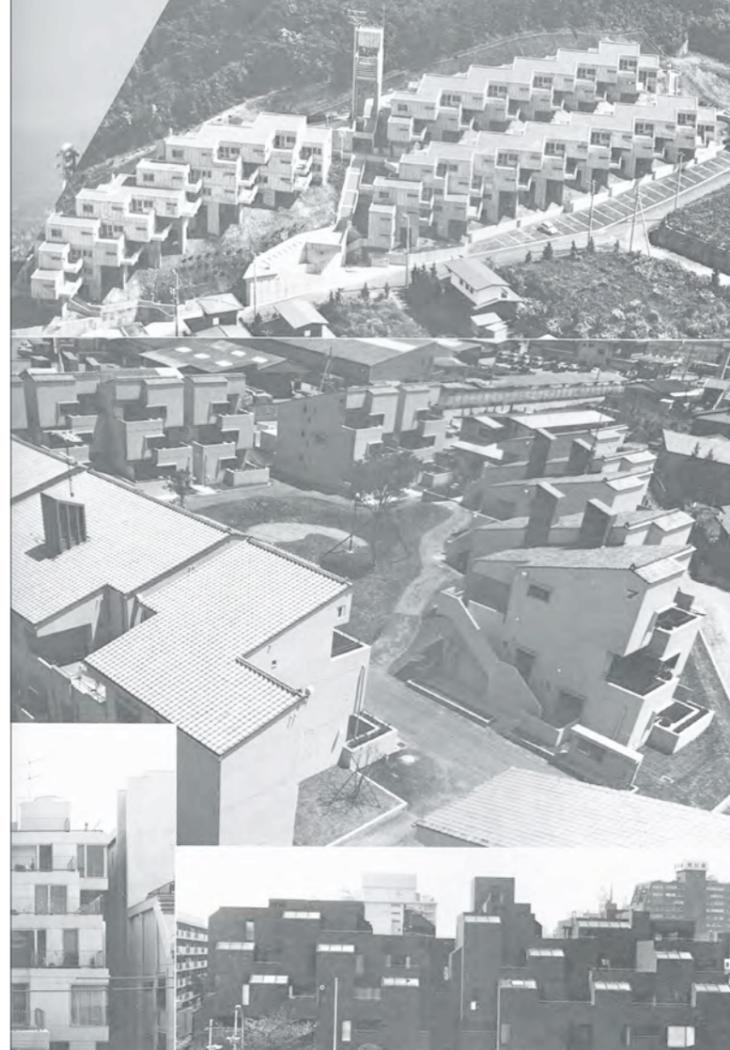


子供らしく住めるまち



幼少の頃住んでいた街が好きでした。「緑や川」が普通に生活の中にあり、四季を感じて季節の花や昆虫や魚と共に生活しました。広場では友と球技をし、川で魚やザリガニを釣って、木登りをして、暗くなると近所の人から「早く帰りなさい」と怒られました。買い物に出かけたはずの母親を探しに井戸端会議場へ出向き「腹減った」と。通学途中は近所の人々から声をかけられました。目を瞑ると出てくるこの風景と街並みが何故現社会から消えつつあるのか。

田中 俊行



ヴァナキュラー性を感じる街



ヴァナキュラー(Vernacular)という言葉があります。地域性・土着性という意味で歴史や文化を抱合するニュアンスがあります。私達はそれぞれ育った場所があり、人生の中で様々な経験をしてきました。故に、それぞれ心地いい場所があると思います。長い年月をかけて育まれた歴史的な街は癒されます。新しい街でもヴァナキュラー性を感じられれば、どこか懐かしく元気がでます。そのような所に住むべきと考えます。少なくとも人工的・無機的・画一的でヴァナキュラー性がない街は文化もなく、住むに値しないと考えます。

連 健夫(むらじたけお)